

チワン 壮族の婚姻習俗

『不落夫家』に関する史的考察

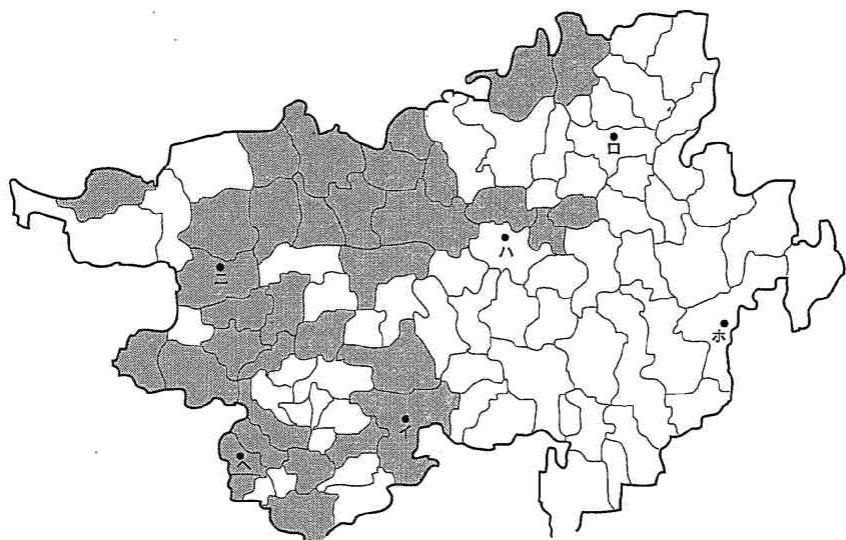
——一九四九年以前の広西を中心として——

塚田 誠之

序 言

チワン
壮族は、中国少数民族のうち最大規模の人口（約一五五万人、一九九〇年）を有し広西壮族自治区に集居する。歴史上、「漢化」過程をたどった民族として知られているが、その社会・文化において未解明のままに残されている問題は少なくない。そのうちのひとつとして挙げられるのが「不落夫家」と呼ばれる婚姻習俗である。それは婚礼の後も花嫁が生家に住み夫と別居し、初生児の受胎とともに夫方に定居する習俗で、壮語でも漢語と同様、「夫方に居住しない」

ことを意味する用語で示される。それは、解放前の広西のなかでも、とくに西部・北部——現在でも壮族の多い地方である——で行なわれていた（大体の分布は地図1を参照）。この婚俗に関して従来の中国本土、ことに一九五〇年代末以降における研究では（後述するように）単系進化主義的な理論の枠組みが前提とされて起点と終点を設定してその中間はすべて「過渡期」として括り、なおかつ母権あるいは母系制の「遺留」という検証することのできない曖昧な概念があてはめられてきた。このため、婚俗の歴史的な変化をふくめて多くの重要な点が見落とされることとなった。



地図1 民国期の文献に見える壮族の不落夫家の地域(県)
(イ：南寧、ロ：桂林、ハ：柳州、ニ：百色、ホ：梧州、ヘ：竜州)

この婚俗については明代末期から民国期にかけておよそ五百年間もの時期において多くの史料があり、歴史的^③研究が可能である。また、一九四九年以前に自身がそれを体験したインフォーマントたちを対象に現地調査を行なうこともまだ可能である。通時的な歴史研究の成果と共時的な調査資料とを結びつけた総合的な検討がなされるべきであろう。また、婚礼の後の別居の期間だけを切りとって分析するのではなく婚姻の全体的な過程の中に位置付けて把握することが必要である。本稿では、この婚俗に関する研究の序章として、一九四九年以前の広西に時代・範囲を絞って、史料に基づいて時間軸にそって変化を追跡することとする。

一 先行研究と問題点

まず、「不落夫家」について主な先行研究を回顧し、問題点の所在を確認しておこう。広西の実権を握った新桂系軍閥の当局によつて、一九三三年以降「改良風俗」政策が推進された。婚俗「不落夫家」も改革の対象とされ、そのため各地で実態調査が行なわれた。当時の一般的な婚姻は次のような段取りで行なわれた「楊煊一九三四a・一九三一九九」。(イ)「訂婚」(結婚の交渉)・男性の父母が媒人を立てて縁談を托す。媒人

能力がない。(二)旧礼教の未改革。嫁が夫の父母に仕えることを苦にする。(三)女性の労働力。生家が娘の労働力を利用して農作業に従事させる。(四)「姉妹」からの影響。嫁が「姉妹」から言われるので、夫方に定居するのを「羞恥の事」と思う。(五)女性の性的行動。不落夫家は郷村に多く、既婚と言つても夫と会つたことのない嫁もいる。普通は年中行事のたびに夫家に帰り一、二夜してまた生家に戻る。出産のときに夫家に初めて帰り同居する。しかし、妊娠せずに三、五、八、一〇年と夫方へ戻らず、それを何とも思わない者もいる。

次に各地の個別的な報告を見てみよう。まず、都安県の場合、次の点が原因として挙げられている「雷輝一九三六」。(一)農業が生活基盤ゆえ、老若男女を問わずともに生産に参加せねばならない。里方では娘が嫁出すれば労働力を一人失うことになる。それゆえ、生産を維持するために娘を暫時留めて家の助けとする必要がある。(二)早婚。五、六歳で婚約、一四歳ほどで結婚する。(三)嫁は里方では比較的自由で拘束を受けないが夫方へ行くと日常生活において夫の監督、姑の蔑視、嘲罵を受ける。(四)これらのことが不落夫家の氣風を生む。そして、もし嫁が夫に満足していても、(不落夫家をしなければ)族中の姉妹・仲間たちの嘲笑を受ける。ここでなされている指摘は先の楊煊が挙げる(一)～(四)と同じ主旨である。

次に邕寧県の場合、六点が挙げられている「亢真化・梁上燕一九三八」。すなわち先に挙げられた生家にとつての労働力、早婚とそれに起因する嫁の父母の不安感、夫方での嫁の不自由、「姉妹」の掣肘のほか、「盲婚」に対する女性の不服従、さらに男女の自由な結びつきを仲立ちする場としての「風流館」が挙げられている。

次に解放後の研究を見てみよう。まず馮深が新たな論点を挙げている。すなわち、不落夫家の要因として「封建包辦婚(父母の統制による結婚)由来説」とそれに対する反論とを挙げた上で、封建包辦婚よりもふるい婚姻形式の「遺留」だとする。そして、「原始氏族社会」時期に「対偶婚」から「一夫一婦制」に向かう「過渡的段階」において生まれたと結論付けている「馮一九五七」。言うまでもなくモルガンの単系進化論的学説の枠組みを当てはめたものである。この方法論は遅くとも一九五七年までには登場し普及したようである。解放直後の段階ではスターリンの「四原則」を当てはめて「不落夫家」も壮族の共通文化の一つであるという説明しかなされていなかった(『廣西日報』一九五二年一月五日)が、大きな変化が生じたのである。以降、多くの学者がこの見方をほぼ踏襲している。が、見逃せないのは解放前に提起されていた論点も(全てではないが)受け継がれていることである。たとえば『壮族百科辞典』編纂委員会(編)一九九三・三七二によると「不

落夫家」の原因として五点が挙げられている。(一)「対偶婚」から「一夫一婦制」に向かう「過渡」における一種の婚姻形式で、「母系制の父系制に対する頑強な抗争を反映する」ものという論点のほか、(二)女性の婚姻への不満。(三)子の出生以前に夫方に定居すると他人から蔑視される。(四)早婚なので家事労働を担うのが困難。(五)女性の自由な生活への未練、という解放前に提起されていた論点が挙げられている。潘其旭も、上記の理論を適用する以外に女性の経済力、女性の結婚に対する不満、女性の自由な性的関係の維持を挙げている〔潘一九八一・七九八二〕。

さらに、莫俊卿によると、「不落夫家」は「原始的婚姻」の「名残」の一つで、花嫁が夫家に短期間泊つて後は里方で暮らし、里方と男家との間を行き来する状態をいう。不落夫家期間中、花嫁は村の娘たちと「歌墟」(歌掛けを主とした男女の社交活動の場)に出かけ情歌を唱うことができる。夫方に行った時にはまるでお客のようにしていて、主婦としてのどのような権利も義務もない。里方では彼女は未婚の娘たちと同じようにその権利と義務のすべてを享有する。ある者は「姑娘田」を耕す権利を享有し収穫は自分の所有となる。身ごもるとはじめて夫家にひき移る。第一子が誕生して盛大な「三朝酒」を挙行したところで、やっと「成家」、すなわち正式に「一夫一婦制の小家族」を成したとみなされる。この時になって里方は「姑娘田」や

牛などの貴重な持参財産を男家に贈る。以上で婚姻の締結までのすべての過程が完結する、という〔莫一九八六(百田訳一九九六)〕。ここでは不落夫家の原因ではなく過程が記されているだけだが、婚姻の過程の中に位置付けることによってそれなりの説得性が付与されているとともに、初生児の誕生を祝う儀礼「三朝酒」の挙行を機に持参財が夫家に送られ、その時点ではじめて婚姻が成立するという指摘が注目される。しかし「原始的婚姻」の「名残」・「一夫一婦制の小家族」という既製理論の適用、事例が個別的なのか一般的なのか、またいつの、どの地点の事例なのか全く言及されていないのが問題である。先行研究において既製の理論を当てはめることによって歴史的な分析の可能性が阻まれて来たことを考えると、個別的な史料を多く用いて婚姻の具体的な過程を時間軸に沿って検討することが不落夫家に対する将来の解明への糸口を得るのに有効であると思われる。以下に、配偶者の選択、婚礼までの過程、不落夫家の開始と期間中の花嫁の行動、不落夫家の終了という一連の過程について歴史的変化に焦点を当てて論じて行きたい。

二 配偶者の選択

壮族は歌を好む民族として知られている。中でも男女の間での歌の掛け合い「对歌」が著名である。歌の掛け合い

が婚姻においていかなる意義を有していたのであろうか。この点について、明代中期から清代中期にかけての諸記事を表1に挙げた。

対歌を行なう当事者は「少婦」「少男」(4、以下数字は表中の史料番号を示す)・「少年」(3・5)「処女少娘」(3)「少年男女」(7)と記されているが、年齢は男性が「冠」(二〇歳、1・女性が「笄」(二五歳、1・5)である。これらの記事において、順序としては、まず当事者が対歌を行なう。対歌のほかに(繡)球を抛る活動(2・8)が付随する場合もある。衣帯・天秤棒などの贈答も伴われる(3・4・5・7・8)。当事者は配偶者を選択し、その後、両親に報告し、両親が婚礼の準備にとりかかる(1・3・7)。5では、対歌を通して配偶者を決めた後に「媒人」に依託して婚約の手続きをし、その際に婚資として蘇枋木で染めたビンロウジの実が用いられている。7では、対歌で配偶者を決めた後に当事者の男女それぞれが父母に報告し、しかる後に父母は媒人に依託して(両家を往来しての)婚約の手続きをし、その際に結納としてキンマを噛む材料一式(蘇枋木で紅に染めたビンロウジの実・キンマの葉・石灰)が用いられている(前掲5も然り。9では結納として牛が用いられている)。対歌の行なわれる季節は、3では旧暦正月、4では春である。ほかに春秋の社日(6)・上元(11元宵、6・8)・中元(6)といった年中行事の

際など、重要な年中行事が行なわれる機会や四季のうち春季に多いことが窺われる。都市・都市近郊・農村との相異(3)も窺われる。郷村では「十指の家」であつても一般の壮族と同じ習俗がまだ保たれている点が注目される。なお、配偶者は同姓を問わない(6)。配偶者の選択に際しては「自ら相い配合」(1)、すなわち当事者の意思による主体的な判断がなされている。そして、そうした行為を当事者の両親はごく自然なこととしており、娘を選んで連れて来た配偶者を「欣然」として歓待している(3)。5では、幼少の時より歌に馴れ親しんだ娘が「笄」の年齢になると両親はこれを「山野に放」ち、彼女が対歌を行なつて配偶者を選ぶようにさせているのである。8には対歌に参加した娘が候補者を連れ帰らねば父母が「楽しまない」と記されている。

明代・清代初期の時期において、地域によつては清代中期までも、配偶者の選択においては当事者の主体性が重視されていた。この点において前掲(第一章)の楊煊らの報告・指摘とは懸隔があることは明らかであるが、ここですらに民国期の記事を見てみよう。

〔史料1〕 民国『思恩県志』二、社会、風俗「冠婚喪祭」

俗に早婚が多い。普通、多くは七、八歳で婚約し、一二、二歳で結婚する。婚約は媒人によつて取り持たれ、年庚八字に

基づく。八字が合つてはじめて結婚することができる。男女双方の同意を求めるものがいれば、媒人が期日を決めて二人を連れて「墟場」(定期市)で面会させ見知らせる。双方が同意すれば成婚可能となる。しかし、当事者が童子である場合、もとより思慮分別もないので、親族や旧友で父母が互いの子を結婚させたい意思がある場合、双方の父母が自ら仕切つて媒人に保証人になつてもらふ。婚姻は「中表」(父方平

行イトコ以外のイトコ)を避けない。同宗を避けるが、同姓婚は少なくない。(中略)「郷村の習慣」として新婦が婚後、不落夫家を行ない一八、九歳に達してから夫家に定居することとが述べられ、その続文に「幼年者が父母を恋しく想うのは人間の天性であり、一二、三歳の女が夫家に住んでも悦ぶわけがない。そこで往々嫁入りした後、勝手に里方へ帰る。ある家では姑が夫をして花嫁を連れ戻したり、ひどい場合には擲打を加えるので、嫁は夫家を嫌がり畏れるようになる。悪感情が生まれ離婚の兆しとなる。この故、郷村における離婚事件の直接の原因として、半分は当事者に、半分は姑の行動にある。」

〔史料2〕 民国『宜北県志』二、社会、「風俗」

婚礼は、父母が仕切り、当事者自らは扱ばない。双方の父母の關係が善く、男女の年貌・貧富の程度が同じなら、適齢期に達しているかは問わず、媒人に托して「問字」(八字による相性占い)をする。女家が許せば娘の年庚を媒人に托し男

家に渡す。男家は星士に占いを頼み、相性が衝剋しなければ結婚が可能となる。(中略)兄弟姉妹の間では結婚しないが、同姓者の間ではこれを避けない者が多い。

ここでは父母が媒人に依託して男家・女家を往来して縁談を決める方式である。見合いの場を設定して当事者の意思を聞く場合もあったようだが、多くは七、八歳で婚約し、一一、二歳で結婚する(郷村では不落夫家の期間を経て一八、九歳になつてはじめて「团聚」することができるといわれ、当事者が実際に決める場合は少なかった。史料2からは父母が選ぶのであつて当事者自らが選ぶのではないこと、双方の年齢・容貌・経済状況の釣り合いのみが問われ、当事者が結婚の適齢期に達しているかどうかは問題にされていないことが明らかである。なお、史料1では早婚のもたらす弊害、婚後生家へ戻る嫁をめづつて夫や姑が關係するトラブルが起きがちであることが記されている。また、史料1・2とも同姓婚が行なわれているが、婚姻過程についてはそれなりに複雑化、言いかえると「漢化」していることが窺われる。

以上より明末・清中期には当事者が「歌を以つて婚を成」(表1-9)していたのが、約百年後になると同じ地域で大きな変化、すなわち早婚と儀礼における漢化が生じていたことが指摘される。それは当事者側から見ると恋愛の自

表1 婚姻における「対歌」の意義に関する記事（明代中期から清代中期）

番号	史料名	編纂年	記事訳文
1	宣徳『桂林郡誌』二〇、雑誌、諸番蛮夷「獵人」	景泰元年 (1450)	男女が冠笄の年齢になると山林に出遊する。男が唱い女が和す。それぞれに適う相手が見つければ、自ら相い配合（えんぐみ）し、贈り物をして思慕の情を結ぶ。後に、父母に告げて婚礼を致す。
2	桑悦『思玄集』四「獵俗詩」	弘治18年 (1505)	互いに唱歌し自ら成親（えんぐみ）する。男女が分れて毬（球投げ）を行う。
3	王濟『君子堂日詢手鏡』	正徳16年 (1521)	郷村では正月元旦か2日から異なる村の「少年」・「処女少嬢」の間で対歌が開始される。歌を通じて（配偶者となすべき）相手を求め、衣物（男はハンカチ、女はシャツ）の贈答の後、13日に男性が女性の家に行く。女性の父母は「欣然として」男性を迎え歓待する。16日まで女性の家で当事者以外の男女たちによる対歌も盛大に行なわれる。件の男女の間に礼物の贈答（女は男から受け取ったハンカチに刺繍を施して渡す）がなされ、以降、二人とも別の対歌には参加しない。この習俗は「十指に数えられる（勢望のある）家でも同様に行なわれる。県城とその近郊ではこの習俗は無いかもしれないもしくは廃れてしまっている。
4	万曆『広西通志』三三、外夷、諸夷種類「獵」	万曆27年 (1599)	「少婦」が春に三々五々連れ立って山頂や水辺に遊ぶ。歌唱して樂と為す。「少男」もまた群をなして、歌いながら女のところに赴く。かくて男女は終日唱和し、衣帯を贈答しあつて去る。
5	『広東新語』一二、詩語「粵歌」	康熙39年 (1700)	粵では歌が好まれる。吉慶事が有れば、必ず唱歌を行なう。（中略）「狼」は幼少より歌を習いとする。男女は皆な歌に倚って自ら配す。女が笄に達すればこれを山野に放つ。少年が数十人も従う。順に歌い、女の意に達った一人が留まる。男女は互いに贈り物をする。男は天秤棒に歌詞数首を刻んだものを、女は刺繍付きの囊・錦の帯を贈り、夫婦となることを約束する。その後媒人に依頼して蘇枋木で染めた檳榔（結納として）贈り婚約する。
6	『粵西叢載』二四、獵、（万曆？）「永福県志」	康熙32年 (1693)頃	結婚は同姓を避けない。上元・中元・春秋社日の際に、男女が答歌する。「苟合」（野合）して、妊娠してから初めて夫家に帰る。
7	康熙『永淳県志』一〇、風俗「獵人」	康熙末 (18世紀初)	少年男女は、皆な歌に倚って配偶者を択ぶ。感情が合えば、男は女に歌数首を鐫んだ天秤棒（金綵・花卉で飾りつけ漆をひいたものもある）を贈る。女は刺繍を施した囊や錦帯を贈る。それらは手製である。夫婦と為ることを約束すると、それぞれ父母に告げる。（父母は）媒人に仲介を頼み、蘇枋木の汁で染めた檳榔・萆葉・石灰を（結納として）贈り婚約をする。

(表1 続き)

番号	史料名	編纂年	記事訳文
8	嘉慶『靈山県志』 一三、雑記、風土「蜜俗」	嘉慶25年 (1820)	上元(元宵)節の期間中、女子が山谷の間に集まる。近くの男子が皆行く(「趁女子墟」という)。(男女の間で)毬を抛りあう。男子は毬の下に銭を結び付け、女子に向かって擲げる。(男子と情の合った)女子は線帯等の物を付けて擲げ還す。互いに山歌を歌い、感情が合えば、女子は男子とともにその実家へ行く。女子の父母は大いに喜ぶ。(男子を連れて来なければ)父母は楽しまず、女子が男子を悦ばせることができないという。
9	道光『慶遠府志』 三、風俗、婚姻、「思恩」	道光9年 (1829)	婦女は外出する際に、麦藁帽子を携帯する。婚姻は、牛を結納に用いる。歌掛けをして歓とする。蜜俗では、大抵は歌を以て婚を成す。

由はあるものの結婚の自由がなくなったことを意味している。要するに配偶者の選択方式は、明清時代に当事者主導型から父母主導型へと変化した。したがって早婚・父母包辦封建婚は不落夫家婚が発生してはるか後に付け加わった現象に過ぎないのである。嫁が生家に戻ることにともなって生じるトラブル、離婚に至っては、おそらくは不落夫家が早婚・封建的な父母包辦婚には適合しなくなつてから表面化した現象である。

三 婚礼までの過程

次に婚礼当日までの過程について、結納の内容、相性占い、儀礼の複雑化の三点から検討したい。まず、各地における婚礼までの過程・結納として贈られる品に関する記事を表2に整理しよう。

またほかに、「漢俗」と「土俗」とが対比されている史料を表3に整理した。

すなわち明末・清中期の頃の結納として10では牛・豚が、12では牛・豚・鶏のほかピンロウジ・酒が用いられている。12では、都市民・郷村の「土民」とともにピンロウジと豚を用いる点と同じだが、「土民」の場合、ほかに「烏飯」(糯米のオコワ)が用いられ、都市では塩・茶そして米花(爆米花)・油団(揚げモチ)などの加工食品が用いられてい

表2 婚礼までの過程・結納として贈られる品に関する記事

番号	史料名	年代	過程	上段：結納品／下段：備考
10	『粵西叢載』二四、獐、(万暦?)永福県志、「潮北獐」	康熙32年(1693)頃	歌掛けをして情愛を示す。	豚・牛
11	乾隆『武緣県志』六、風俗「冠婚」	乾隆6年(1741)	納采・納吉・納徴・請期・親迎の礼がある。	<p>財(貨幣)を重んぜず、檳榔・豚・酒を用いる。「土人」は婚姻は同姓を論ぜず、庚帖を須めず、但だ檳榔数枚を結納とするのみ。</p> <p>女家は結納を受け取ると親族に分ける。婚礼の1、2日前、酒肴を揃えて遍く親族を呼んで会飲する。女家の親戚は銀簪・指輪・布帛等を送る。これを「幫填箱」という。</p>
12	乾隆『鎮安府志』一、輿地上、風俗「婚嫁」	乾隆21年(1756)	媒人への縁談の依託～星士による占い～女性の父母の許可～結納～婚礼日期決定～婚礼(土族・富家のみ飾り轎を用意して親迎する)。	<p>檳榔・塩・茶・米花・油団・豚・鶏(家の貧富に応じて決める)。「土民」は、檳榔・烏飯・鶏・酒・豚・牛を結納とする。</p> <p>婚礼に、男家の親戚友人が銀元・米・豚・酒を贈る。女家の親戚友人は腕輪・首飾りを贈る。「土民」は庚帖を得るが、或は鶏卜に憑り、或は醸酒の甘苦を験べ、以て成否を決める。土民は、婚礼の当日に新郎が花嫁の家に行く。そこで嫁側は親戚を集めて飲飲する。薄暮になると新郎は先に夫家へ帰る。その後新婦は母や親戚らとともに夫家に至る。嫁入り行列に綵轎・鼓吹はない。夫家では花燭の飾りが用意されず合香の儀礼は行なわれない。</p>
13	道光『白山司志』九、風俗、冠婚「司冊」	道光10年(1830)	土人は婚姻に庚帖を用いない。官族は漢人のように六礼を行なう。惟だ納采には檳榔を尊ぶ。おそらく土俗に沿っているからであろう。	土人は、但だ檳榔一槍(たる)・指輪一对を送るのみ。結納を贈る日には、(結納として)檳榔に重きを置く。「富厚家」は千を以って計える。蘇枋木でこれを染める。8枚ごとに蓑葉で包み、積み重なって数十～百包にもなる。また束ねないで盆に盛り、蓑葉2、30枚ごとに一束として紅絨を巻きつけたものを添える。次いで酒・豚肉・糕餅で、總じて量の多さを尚ぶ。首飾りは甚だ簡素で、惟だ銀の簪・腕輪・指輪などいくつかのものが送られるのみである。結納金は多寡を論ぜず、その家の経済力に従う。

(表2 続き)

番号	史料名	年代	過程	上段：結納品／下段：備考
13 下段				婚礼の日、「有力家」および「墟市に近い者」は、四人あるいは二人で担ぐ輿の四隅に華やかな装飾を施した絹を結んだものを用い、楽隊が先導し、爆竹の音が道筋に絶えず響きわたる。貧しく「深山郷僻に居る者」は、(花嫁は) 率ね歩行する。花嫁は雨傘をさし、婦女たちが囲んで送る。交拝の後、親戚・友人が囲み坐り飲酒し、土歌を唱う。朝になって解散するまで歌い続ける。
14	民国『柳城概況』三「民族」	民国23年(1934)	問名・納采・納吉・請期	ただ紅色に染めた檳榔、(銀元) 2、30元～100元を送って結納とするのみ。 婚喪やその他の意外の事で費用がかさんだ際に、土地を典売・売却して経費を借りる。唱歌が盛行。婚嫁の時には親友が常に訪問し合い集まって夜通し唱歌する。
15	[田 1935 : 41-43]	民国24年(1935)	媒人による年庚の請求(「要命」)～婚約成立	郷村では縁談のはじめは媒人が方形に切った豚肉1塊をもって女家に「要命」(「命」=年庚)をしに行く。女家が許さなければ、肉を受け取らず、媒人をひきとめて食事を振舞ったりしない。許せば肉を受け取って媒人をひきとめる。婚約の時に男家は豚肉若干・白米若干を女家に送る。これを「出籃」といい、女家がそれを受け取る礼を「食籃」という。

表3 道光『慶遠府志』三、地理下、風俗「婚姻」の記事

漢・土の別	結納品	過程その他
漢俗	檳榔・豚・酒・菓品	(受け取った物品を女性側では) 遍なく親戚に分ける。新婦が出産すると里方は土錦で褌を作り、銀の首飾り・鶏・チマキとともに贈る。
土俗	豚・牛を用い、檳榔・菓品の類はない	男家は幼女二人ならびに土巫をもって、女家に往き嫁を先導する。嫁方の男女30～50人が送行する。新婦は傘で自らを覆い、歩行して夫家に行く。夫方で聚り坐り夜通し唱歌をする。その後新婦は生家へ帰り、夫と会わない。後、社日・挿秧日・収禾日のときに、夫家へ一度行く。三、四年後に嫁の父母が奩具を製って送り、初めて夫家に常往する。

る。11では、都市民・郷村の「土人」ともにピンロウジが重視されている（「土人」の場合貨幣は重視されない。ピンロウジ「救救」のみで、「士大夫」をふくむ都市民の結納より数量的に少なかつたようだ。また八字を用いていないので手続きも比較的簡単である）。ピンロウジは前掲表117にも記されており、広く用いられていたようである。13は土官領の事例である。領民「土人」の場合、ピンロウジを贈与するのが主体で、婚約・結納にそれが多く用いられている（婚約の際にはピンロウジ一盒と指輪一對）。土人のなかでも「富厚の家」では数千枚ものピンロウジが用いられている。八枚ごとに蕁（キンマ）の葉で包んだものを数十、百包、また盆に盛ったものに蕁葉を付け、二、三十葉で一束としたものに紅布を巻いたものが贈られる。「八字」は用いないなど、儀礼は簡単なようである（ほかに酒・豚肉・モチが贈られており、品物の量的な多寡が重視されている）。加えて首飾・銀簪・腕輪・指輪などの（銀製）装身具も贈られ、（まださほど重視されていないが）結納金の贈与もなされはじめているようだ。「土人」のなかでも「有力家」「墟市に近い者」と「深山郷僻に居る者」との間で花嫁の嫁入り行列において相異が現われている。他方、土官の統治階層「官族」は領民統治のために領民と自らを差異化するよう漢文化を積極的に取り入れたように、漢式婚姻儀礼「六礼」を受容し、婚儀も漢式に沿って

いる。当然、不落夫家を行なっていない。しかし結納にはピンロウジを重視しており、その点では「土俗」からも完全には遊離しきれていない。14ではすでに銀元が必要とされているがピンロウジもまた重視されている。なお、15では、縁談にも結納の際にも男家からの贈り物は豚肉が主体である。表3ではピンロウジが漢人都市住民の用いる結納品、農村の「土俗」＝壮族の習俗では豚・牛のみでピンロウジや菓子などの物は用いられないとされている。

以上から、結納品として基本的にはピンロウジと豚・牛が併用され、漢人との差異化のためかピンロウジを用いない場合もあつたこと、この傾向は清代初期～中期において、所によつては民国期にまでも維持されていたことが指摘される。ただ、他方で清中期以降銀元が次第に重視された場合もあつたように、この点について、次の記事がある。

〔史料1続文〕

結納は乾隆・嘉慶年間のころは、皆な牛を用い、ほかに羊・豚・鶏などをも用いていたと伝えられる（「水礼」という）。富者は牛などを偶数分揃え、貧者は単数としていた。道光・咸豐年間に至るや、牛に代わって銀を用いるようになった（「折乾礼」という）。（中略）女家は布を用いて酬いる（「牛纓布」という）。現在、結納金の額は少ないもので五〇～六〇元、多いものでは一〇〇～一二〇元になる。その換算額は

かつての牛一頭二頭の値になる。この乾札のほか貧者は銀のイアリングと腕輪を、富者は金のイアリング・金の指輪・玉の腕輪等を用いる。水札には四種類の高産物を加える。結納を贈るため女家に行く際に男家は必ず別に「乳猪」（生まれた豚）一頭を備える。花嫁が嫁ぐ際には新郎も迎えに同行する。その時には豚肉一〇〇斤を持参し贈り、女家は錦布付き蒲団・馬を返礼に贈る。ただ婚約をするだけでも女家での酒宴の経費は莫大なものがある。近頃は花嫁を迎える当日になって、初めて正式に結納を贈る場合もあり、比較的簡便になっている。

〔史料2続文〕

結納の金額を相談して決めるが、上流家庭は八〇―一〇〇元、中流は五〇―七〇元、下流は三〇―四〇元である。両家が仲睦まじい場合、結納の金額の相談はしないこともある。（中略）結納の贈り物として規定の結納金のほか、それを男家が女家に渡す日に男家が子豚一頭・鶏二羽・アヒル二羽およびシイタケ・茶葉・塩・砂糖・麵・菓子を用意、それぞれを一包みずつ包む（「水札」という）。媒人が女家に通知して日期を約定する。男家の父か母が族内の数人に同伴をもとめ女家にする（「押札」という）。女家は布帛・紅色に染めた搦きモチ・砂糖・糕モチの類で返礼する。婚礼には、男家では吉日を選び大豚一頭（五〇斤以上）、豚肉二・三〇斤、糯米のおコワ五〇斤、酒四〇斤（下流の家では簡素になる）を前日に嫁方へ届け、嫁方では一族を集めて歓飲する。男方はこの際に少女二

人を媒人とともに派遣して「接親」する（中上流家庭では花婿が親迎するが、その際に嫁方に泊まって朝まで唱歌を行なう）。翌日、新郎新婦が連れ立って夫方に来る。鼓楽の音が天まで響き、（花嫁を送る）女性たちが雲のように多い。嫁方は妝奩しづみぎとして帳被（蚊帳・蒲団）の類三、五―一〇セットを備えて贈る。或はまた牛馬を送る者もある（それぞれの家の実情に応じて量を決める）。

史料1続文からは、乾隆・嘉慶年間のころまでは牛を主体に羊・豚・鶏などを用いていたのが、道光・咸豊年間には牛に代わって銀元を主体としほかに金銀裝飾品を用いるようになったこと、史料2続文でも結納が銀元で支払われ、ほかにさまざまな種類の物品が贈与され女家からも答礼の品が贈られていることが知られる。結納について次の記事もある。

〔史料3〕 民国「明江県志」、人物紀「風俗」

下定の時 檳榔・キンマの葉・糯米のおコワ・香糕モチの「四色」を用いる。並びに首飾りに代えて銀三元を贈る。下定の後、年中行事のたびに、節食として備えた食物を餽送する。また下定の時に、香糕四盆分・銀二〇元ないし三〇元をもって年中行事の際に贈る礼物に代えるものもある。下定の日、男方で富者は親戚・朋友を招いて宴飲するが、貧者には無い。（中略）婚礼前の半年以内にまず小礼を女家に納める。また

檳榔・キンマの葉を贈り、別に帛三〇元分をも用意する。富家は四、五〇元もの帛を用意する。女家が嫁奩じよんかんを用意する元手とするためである。女家は、青布一端を答礼に用いる。富家は絹綴を用いる。

ここで贈られる品物としてキンマ用具(材料)とともにオコワやモチなど糯米製品が首飾りや銀元の代替物として用いられており、その点で伝統が維持されていることが知られる。次に相性占いについて、前掲表2-11・13によると「土人」のもとでは「八字」はまだ用いられていない。12の「土民」の場合、「八字」を得るようになってはいるが、実際には鶏トや醸造酒の味によって相性を占っていたという。「鶏ト」とは、鶏骨の裂け目による吉凶判断法で、壮族に独自のものは限らないが、両広地域に見られる古い習俗の一つである。八字と酒の醸造との関係について次の記事もある。

〔史料4〕 雍正『広西通志』九三、諸蛮、蛮疆分隸「永寧州」婚約は先に男女の年庚を書く。酒を甕中で醸す。酒が良くできれば結婚する。女家は一族を集め蘆笛を吹いて嫁を送る。(夫方で)夜通し歌飲し、朝に嫁を連れて生家へ帰る。数年経って嫁が長ずれば、更めて粧じよんかんを用意するがそれはまるで初婚の礼のようだ。

ここでは八字を書いた庚帖を取るほかに、同時に酒の醸造をし、その結果(出来映え)によって吉凶判断をしているかのようである。そうとすれば、八字と醸造酒とを併用していることになる(なお、史料4からは清代中期に所によっては早婚も見られたことも窺われる)。史料1・2に示されているように清末以降には八字が婚礼までの過程に組み入れられたことからすれば、清代中期に広西西部で壮族文化とが並存しながらも漢文化が次第に浸透していったことが推測される。

表2-11では、おそらく都市民の間で、納采・納吉・納徵・請期・親迎と婚姻儀礼が複雑化している。13では、土官の官族の間では漢人同様に「六礼」を受容し領民との相違が生じている。史料1・2、表2-15では媒人の仲介・八字の使用が定着しているかのようである。史料2続文では礼物を一つ一つ包むことが、表2-13では礼物に紅布を巻くことが、史料3では年中行事のたびに両家の間で贈答が行なわれている(贈答の応酬は史料2続文からも窺われる)。

以上から、儀礼が複雑化・漢化する傾向にあったことが明らかである。

本章から、婚礼までの過程について、結納・相性占い・儀礼の複雑化の三点において変化し漢化する傾向にあったことが指摘される。とともにすでに引用した記事からは婚

礼当日の状況も知られる。たとえば表2-12からは、「土民」の場合、嫁方で一族親戚が集結して酒宴が開催され、婿が薄暮に先に帰り、のちに夜に嫁入りの運びとなることが記されている。また、表2-13からは、夫家での婚礼の後に花嫁に随行した女性たちと夫方の者との間で夜通し対歌が行なわれたことが記されている。婚礼当日の諸活動については次章であらためて検討しよう。

四 不落夫家の開始と期間中の花嫁の行動

(一) 婚礼当日の状況

(1) 花嫁の送迎

前掲史料2続文では、婚礼の前日に夫方から嫁方へ肴・糯米のオコワが届けられ、嫁方で一族を集めて宴会が行なわれている(表2-12も同様)。壮族の婚礼の特徴は史料2続文や表2-14に見えるように親戚友人が多数集まり盛大に祝宴が行なわれることと唱歌が伴われる点にあり、嫁方での唱歌は婚礼の数日前から始められた。この点について、民国「遷江県志」二、風俗「婚嫁」には、婚礼の三日前に女性の親友、伴娘たちに来てもらい花嫁と一緒に過ごすこと、当日の夕方に花嫁は伴娘たちに伴われて哭泣して離別の情を訴えること、その後終夜(夫家で)互い

に唱歌することが記されている^③。

嫁に同行する伴娘は、先の「遷江県志」や表2-13では「親(戚)・友(人)」と記されており、嫁の親戚関係にある者か友人関係にある者になった。なお、漢人のもとで見られる「同年」(同じくらの年齢の者による擬制的な親族関係)の存在が想起されるが、「同年」関係にある者が嫁入りに際してとる行動は、管見の限りでは史料では明確にし得ない^④。さらに、所によつては「十姉妹」と呼ばれる結拜儀礼を経て結ばれた娘たちが随行した。この点について解放直後の武鳴県の調査報告に記事があり(武鳴県僅族婚姻情況)、先に挙げた先行研究からもその存在が窺われるが、目下のところ史料的に十分な材料を得ていない。

さて、表3「土俗」によると、婚礼当日、夫方から「幼女二人」と「土巫」が花嫁を先導するために来た。嫁方からは三〇〜五〇人もの男女が随行した。花嫁は傘をさして歩行する。ここで「土巫」が迎えていることと嫁を送る人員の数の多さ、花嫁が歩行して傘をさして行くことが注目される。嫁入り行列についてさらに次の記事がある。

〔史料6〕 民国「河池県志」二、輿地下「風俗」

郷間の女子は、初め嫁ぐときに奩妝を持つてこない。女家からは嫁を送る人間は幾人とも限らない。男家からは三人と童子一人が迎えに来る。(中略) 女側の送親の陪伴嫁娘は、嫁

に寄り添って離れない。このため婿は嫁が誰だかわからない。三朝の回門の際には、婿と同輩たちが嫁を送り、郊外に出ると嫁側の女性たちと互いに対歌をする。(意中の相手が見つかる) タバコの葉・ハンカチを交換して記念とする。

〔表1-7 続文〕

婚礼の日、迎親送女たちが歌うが、声が林木を振るわせるほどである。嫁が夫家に至った後、夫の父が彼女の背を三回撃つ。嫁は夫から贈られた天秤棒で水を汲んで甕の中に入れてから生家へ戻る。

史料6では、婿から見て嫁が誰だかわからないほど多くの伴娘たちが嫁に寄り添って夫家に来る情景が窺われる。表1-7 続文では、婚礼の当日に、夫方からの出迎えの者と嫁方からの送別の者とは(夫方へ行く途中の路上で)「歌声が林木を振るわす」ように盛大に対歌を行なっている。表2-13によると「有力家」や「墟市に近い者」の花嫁は2-4人で担ぐ飾り輿に乗り、楽隊の先導付きの嫁入り行列をなし、爆竹を放ちながら道中を進んだ。だが「深山郷僻に居る者」の場合、花嫁は雨傘をさし歩行して婦女たちがこれを囲んで送った。婚礼の行列においても、社会階層や居住環境によっては相違が見られたこと、「有力家」の場合、漢化しつつあったことが指摘される。嫁迎え習俗にはこうした階層差のほか、広西でも地域差が見られた。

婚礼の日、花嫁に随行してきた人々と夫方の人々が儀礼的な対歌をする場面(1993年12月、南丹県月里郷にて)



以上から、婚礼の前に多くの伴娘が来て花嫁に随行したこと、彼女たちが花嫁とともに唱歌をし、また祝宴でもそれを行なったこと、嫁入り行列には漢化の傾向も見られたことが指摘されよう。

(2) 夫方での儀礼

婚礼の日に夫方ではどのような儀礼が行なわれたのであろうか。また、不落夫家婚の場合、一旦夫方へ嫁入りした後には花嫁が里方へ帰り、以降受胎するまで主に里方で過ごすことになるが、婚礼の後何日目に、またどのような形で里方に帰ったのであろうか。この点について表1-1続文に次の記事がある。

成婚の日、婦は夫家に帰すが、舅姑に会わず、夫とも接せず、便戸から出る。

明代中期、花嫁は夫方で夫の父母にも会わずに、すぐに裏口から出て里方へ帰ったのである。表1-4前文でも「花嫁を娶ったその日に嫁はただちに里方へ帰り、夜は近隣の女性とともに住む」と記されている。『赤雅』上「丁婦」にも、「婚礼の日に嫁は即ちに母家に還る」と書かれている。しかし、後に花嫁は夫方に一、二日泊まるようになり漢式の婚礼に近づくようになった。夫方での婚礼について表2-15続文に次の記事がある。

婚礼の日、男家が豚肉・白米・粉糝・腕輪・耳飾り・酒それぞれ若干を用意して、小規模な楽隊を付ける。輿は用いない。女家も嫁粧を備えずただ女眷（一族中の婦女、数人が新婦に伴い歩行して男家に行く。夫家で「登堂拜祖」の後、女眷は新婦とともに夫方で一晚過ごす。翌朝、新婦とともに生家に帰る（夫妻の合歡はない）。

ここでは花嫁は夫方の正庁で謁祖し、その儀礼の終了後、随行してきた伴娘数人とともに一晚過ごし、翌朝に伴娘たちとともに里方へ帰っている。このほか、先の史料2の続文には、（正庁の祭壇で）夫方の祖先および尊長を拝んだことが記されている。表2-13では夫婦の「交拜」のことが記されている。しかし、史料2続文で「ほかの儀礼を行なう者は少ない」とされ、また表2-12続文で、夫方でも飾り蠟燭は用いず「合盞」（夫婦の交杯）の儀礼もなかったことが記されており、夫方での婚礼自体が比較的簡素である。おそらく漢式儀礼を一定程度受容しながらも儀礼が簡略化されがちであったのであろう。

夫方での儀礼が終了すると、表2-13・表3「土俗」などにみえるように、洞房において夫方の親友たちと嫁に随行してきた者たちが花嫁を囲んで夜を徹して唱歌をした。漢式儀礼を受けいれながらも他方では対歌の伝統も維持されていたのである。

(3) 婚礼後における嫁の里方への移動

婚礼の後に嫁は里方へと帰ることになるが、表2-12・13では翌朝には帰っている。このほか次のような場合が見られた。

〔史料9〕 趙翼『簞曝雜記』三「辺郡風俗」

その俗は成婚するのが早いといつても、初婚の時に夫妻は例として同宿しない。婚礼の夕に、嫁は夫方の隣りの傭一人を伴んでその乾娘となつて、これとともに寝る。三日以内に、義父母のために天秤棒で数回水を汲んで、即ちに母家に帰る。

すなわち、婚礼の当夜、花嫁は夫方の近隣に住む女性の「乾娘」となり、これとともに泊まり、三日以内に夫の父母のために水汲みをしてから里方に帰ったという。名づけをめぐり擬制的な親族関係を示す「乾娘」は漢人側からの表記であるから、この場合それに似た状況が見られたのであろうと推測される。この点について婚礼以前にあらじめ寄宿先を探しておく婚礼後にその家に行くという主旨の記事もある（民国『鳳山県志』二、風俗「婚之陋習」）。なお、水を汲んでから里方へ帰るのは表1-7の続文にも記されている。舅が嫁の背を三回打ち、嫁は夫から贈られた天秤棒を用いて水を汲んで甕に入れるのであるが、最初に夫方で嫁のする台所仕事の水を汲む行為であるという漢人的觀念の影響が反映されているのであろう。

史料1続文の場合、嫁は夫方へ来て信宿（二夜）経ってから三日目の朝に里方へ帰っている。史料2続文でも婚礼後三日目に帰るが、それまでの二夜は嫁に随行してきた數十人もの伴娘が「群を成して」洞房で対歌をしている。花嫁が婚礼後三日目の朝に里方に戻る点は漢族の「三朝回門」を想起させる。ただし、漢族の「回門」では夫婦が嫁の生家を訪問して嫁方親族に婚礼を披露する目的を終えるや当日に夫家に戻るが、壮族の場合、それとは異なっていた。すなわち、嫁が生家に戻り、以降そこに居住する始まりが「回門」と称された。史料6でもそのことが「三朝回門」と表記されている。

この点に関して次の記事がある。

〔史料10〕『古今圖書集成』方輿彙編、職方典一四四三、南寧府風俗考、永淳県「獮人」

その婚礼に至つては、尤も笑うべきである。女が夫家に帰るや、即ちに生家へ還る。嫁して婚を成さないのである。

この記事の著者は、「笑うべき」習俗であるという見解を表示するとともに、「嫁して婚を成さない」、「つまり婚礼を行なうことによつても結婚が成立していないという表現をすることによつて漢文化の物差しでは理解されにくい習俗の説明を試みている。婚礼に参加し水汲みをして（即日生家へ帰ろうとも三日目に帰ろうとも）、畢竟、漢文化の

伝統的な尺度からすると婚禮によつて結婚が成立しなかったのである。そのことは次に花嫁の行動を見ることによつてより明確になろう。

(二) 別居期間における状況

(1) 夫方との往来

婚礼の後、里方へ帰つた花嫁は里方でどのような行動をとつていたのだろうか、また夫方との間でいつどのような往来したのであろうか。本節では花嫁が里方へ帰つてから初生児の出生までの時期について検討する。まず明末の次の史料がある。

〔史料11〕『粵西叢載』一八、蠻習、王士性《桂海志統》、「獐」ただ耕作收穫、四時節令の折にのみはじめて夫家に行く。夫家へ至つても、夫と言葉をかわさず同宿もせず、(夫家の)隣家の婦女宅に寄宿する。

表1-7続文にも「年に一度夫方へ行き田作を助ける」とある。表3「土俗」にも「社日・挿秧日・収禾日のときに、夫家へ一度いく」と記されている。表3の場合、水稻耕作の田植・收穫の日に帰るのである。史料1続文には次の記事がある。

(嫁が里方へ帰つて)以後、種地・挿田・剪木の時期になる

たびに、また夫家の房族に婚喪事があれば、新婦は必ず夫方へ来る。久しく経つと、五日、一〇日、二〇日、一ヵ月と夫家へ留住するようになるが、それでもまた生家に帰つて一月あるいは旬日と暮らす。一八、九歳に達して初めて团聚することができぬ。

田植・收穫期には新婦は「必ず来る」必要があつたというが、その理由として次の記事が手がかりを与える。

〔史料12〕 民国三五年『東蘭県政紀要』(甲) 県政概況、総述、九「風俗」

出嫁した女は、信宿後に生家へ帰る。毎年、農作及び收穫の時のみ夫家へ戻つて一、二日、或は数日住む。故に多く外過に染まるのはこのためなのである。嫁に夫方へ帰るという意思があれば母はそのことを即ちに男家に伝達する。棉畚を作るということに名をかりて夫家に来る。その際に女家は親族の者を誘つて同伴してもらう。少ない場合で数十人、多い時には一〇〇―二〇〇人にも達する。大豚を屠殺し、糯米のオコワを蒸し、朝食として用意する。四隣の少年たちが雷の如く歓声を挙げて、群がって焼畑の地に行き、そこで対歌して相い調笑し晩に及ぶ。夫家もまた大豚を屠殺し、酒・飯を備えて款待する。男女の唱歌は、翌朝になつてはじめて解散する。

すなわち、里方へ帰った花嫁は農作・収穫の際に夫方へ一、二日あるいは数日間戻る。花嫁に夫方へ定住する意思がある場合、嫁の母がそのことを夫方に伝達する。夫方へ来て焼畑で綿花を植えるということを口実にする。嫁の親族數十人から二百人もが来て、豚をつぶし糯米のオコワを作つて宴会をする。夫方も豚・酒・飯を用意する。(夫方の村の)少年たちも歓声を「雷の如く」挙げて「群がって」行き、(嫁方から来た者と)対歌を行なうという。花嫁が夫方に定居するときの宴会は、実質的な婚礼宴を想像させる規模であるとともに、その宴会が(花嫁が来る口実としても)焼畑を作る地点で行なわれている点が注意を惹く。ここから、花嫁が夫方に来て農作業に参加するのは労働力としてよりも儀礼的な意味合いが強いことが推測される。なお、嫁は夫方に一、二日程度しか滞在していないが、この点、田畠嵐によると寧寧県では、嫁は「毎歳夫方に来るのは多くとも三、四日を過ぎない。他は生家で仕事をする」[田一九三五・六五―六六]のであり、奉議県でも「毎年一、二回(或は三回)のみ夫家に来る。毎回僅か一、二日で帰る。」[田一九三五・二二五―二二七]のである。儀礼的に過ぎないのであれば、嫁が全体の仕事量からみるとごく僅少な過ぎない短期間しか夫方に滞在しないのも自然の成り行きであるように思われる。なお、先の史料、表3「土俗」全文では田植え・収穫のほかには社日にも来るとされている。

それは漢人に起源する祭りだが、おそらくは壮族の人々にとつて豊作をもたらす重要な行事と考えられていたからだろうと思われる。このほか新婦が年中行事の際に来ると記されている場合もある。夫方では花嫁は多くの史料にあるように夫と同宿しない。そのために近隣に寄宿先が必要である。なお、同宿はもとより、史料11では嫁は夫方に行つても夫と言葉をさえ交わしていない。そもそも嫁が夫方へ来てまた生家に戻ることにについては、嫁の意思に一任され、他人が強制することはできない。この点について次の記事も重要である。

〔史料13〕『南寧民国日報』一九三一年四月二〇・二一日「南寧鄉村婚嫁的惡習」(採訪)

花嫁が生家へ帰つた後、夫家は嫁方へ行つて嫁を探し求めることはできない。嫁の父母も嫁に強制して夫家へ帰らせることはできない。ただ自然の成行きに任せるのみである。毎月初一、一五日にはじめて夫家に来て夫の祖先を拜む。ただ一、二時間ほど滞在するだけである。年中行事のつど夫家へ行くが滞在時間は短かく、長くとも一夜夫家に泊まるだけである。たとえ夫家で厳しく監視しようとしても嫁は間に乗じて遁去する。甚だしい場合には田間あるいは路上で出会つた時に夫が嫁を「賊を捉えるように」連れ戻そうとする。植え付けの時期には新婦は夫方の田地へ行き仕事をするが、夫の家には

入らず、飲食物も義母が田間へ送り届ける。そして農作業が終わればそのまま生家へ戻る。このようにして数年あるいは半年・一年と経って嫁が夫家に戻りたいと決心してから、夫側ははじめて同居しようとする目的を達成するのである。

ここでは、嫁は夫家の祖先祭祀の折に来て祖先を拜むようになっていたが、しかし一、二時間ほど祖先祭祀をするほかは何も家事をしていない。食事も義母が田地にいる嫁へ届けている。さらに、彼女は農繁期には夫の家に入らずに直接田地に来てそこから生家へ帰っている。また夫家・生家ともに彼女に夫家に戻ることを強制することはできないし定居するのは嫁の意思次第であるというが、他方で(史料1続文にあるような夫家による嫁の虐待にまでは至っていないが)夫が嫁を捉まえて拘束しようとしたり、嫁が夫家の監視を受けるような現象が生じるよう変化していることも注目される。

以上から、不落夫家期間中においては婚姻関係が確定しておらず嫁が夫方・嫁方双方へ両属していることが推測される。史料13で嫁が夫家の生活に関与していないのに祖先祭祀を行なっているのはそのことを示している。表2-15続文に、

毎年四、五月の間の農繁期に花嫁は夫方へ帰り三、五日仕事

をする。これを「幫工」という。このようにして三―五年経ち妊娠するのを待って、女方の父母は初めて帳被(蚊帳・蒲団)を用意し、花嫁を夫家に送り偕老させる。

とあるが、婚礼が済んでいるのに「幫工」という表現が用いられているのも右の側面からの解釈が可能であろう。なお、史料1続文によると、嫁が里方に帰って一ヵ月後に夫方が迎えを派遣して嫁が再度夫家に戻り、二夜後に再度里方へ帰っている。嫁が夫方で過ごす期間も五日、一〇日、二〇日と次第に増えている。史料2続文でも嫁は次第に頻繁にくるようになり、そのことが「走媳婦路」と表現されている。史料13でも夫方に定居するのは受胎する前になっている。(地域差があるが)総じて清末以降には夫方へ帰る頻度と時間、不落夫家の期間・終了の契機は固定的ではなく、時代とともに変化して来たことが指摘される。

(2) 新婦の行動の自由

里方における花嫁の行動について「广西壮族自治区編輯組(編)一九八四・五二一六二」では隆林県委楽郷の事例として、不落夫家期間中、父母は自分たちの田地の一部を娘に与えること、その田地で収獲した作物は全て娘の所得になること、父母は彼女の衣服・小遣い銭を負担しないことが指摘されている。先の莫俊卿の「姑娘田」が娘に与えられるという指摘と相まって、嫁は生家で経済的に独立し

ていたことが推測される。⁽²⁹⁾ そうとするなら、(生家に対してどのような「義務」があるのか不明ではあるが) 彼女の労働は夫家に対するのに加えて生家の経済にもほとんど寄与していないことになる。そうであるなら、広西では「夫を養い家庭の経済生活を担うことができなかったらその女は無能」[田一九三五・四九一五二]とまで記されるほど既婚女性の労働力が突出していたが、そのことと不落夫家とは直接の因果関係には無いことが指摘されるであろう。

嫁の行動について「簪曝雜記」三「辺郡風俗」には、広西の「土民」のもとで春になると「墟場」(定期市)が開設され人々が唱歌に來ること、その際に夫妻が居りあわせ、妻が他人と嘲弄^{なわめあそび}しているのを目撃しても叱責せずに逆に喜ぶ者がいること、その理由として妻が他人を悦ばせることができるためで、悦ばせることができなければ夫方に帰った時に却ってこれを罵る有り様であることが記されている。この史料ではさらに、自由な性的行動「做後生」の習俗があるために嫁が夫方に定居しながら不落夫家が生じること、夫方に定居した後もこれまでの経緯があるので些細なことで離婚することが記されている(そして地方官(鎮安知府)であつた著者がこれを變革しようとして民に一笑に付されたという)。こうした現象について次の記事も重要である。

〔史料14〕「粵西偶記」四

女は生家に返つた後、夫とは会わず別の男性(「野郎」という)を招き生家で同宿する。妊娠した後は「野郎」を捨てて夫家に帰る。不落夫家期間中に夫が嫁の生家に行くこと逆に奸を以て非難される。嫁が夫方に定居して以後、「野郎」が件の嫁と夫家・嫁の生家ないし他所で会つたら奸通とされる。

潯州の「狼人」(「獐」)に関するこの記事から、花嫁は初生児の出生前に里方において情夫「野郎」と性的關係を持つているが、それに花婿が抗議することができないこと、しかし一旦受胎するに及ぶや「野郎」との關係は不正常のものとなることが注目される。嫁の行動について雷輝は、一部の頑固な家庭を除いて「異常に自由」であること、彼女たちが三々五々連れ立つて外出し相手側と情歌を歌うこと、「夫は名称は夫だがその実を享受していない」ことを報告している[雷一九三六]。

『簪曝雜記』に顕著のように、漢人官僚の壮族領民に対するまなざしには、自文化の規範からはずれる習俗については、彼らのもとで認知されているように異端視する姿勢が映し出されている。さらに『簪曝雜記』では、嫁の性的自由と不落夫家とが因果關係でもって語られている。右のエスノセントリックな姿勢からすれば不落夫家期間中の単なる現象であつたことが因果關係へと曲筆されて記されている。

る疑いもあり、この点は疑問点として保留しておきたいが、少なくとも里方での花嫁の自由な行動が壮族の人々の間で社会的に認知されていたことが指摘されよう。史料14では漢人の社会で使われる「奸通」の概念を用いて説明が試みられているが、そこから右の点を読みとることが容易であろう。

ところで、解放直前の頃には壮族の間での価値基準は変化しつつあったようである。雷輝の報告によると、夫たちの中には自ら嫁を連れ戻しに行く者がいること、それは往々失敗するが、嫁の父母の援助を得て嫁を連れて夫家に帰る者もいたことが記されている〔雷一九三六〕。また、〔广西壮族自治区編輯組（編）一九八四・五一―六二〕にも次の記事がある。

ある男は明らかに妻が他人と恋愛しているのを知りながら間男を捕まえられなかった。むしろそのことを問わずに自らは別の女性と恋愛をしたり妾を取ったりした。ある男は妻が夫家に来た時にきっかけをさがして殴打したり罵倒した。甚しい場合には里方へ至って無理に連れ戻した。

地域差もあるだろうが、清代〔簷曝雜記〕および史料14と比べると相違は明らかである。解放直前の時期には、少なくとも不落夫家期間中の花嫁の自由な行動に対する社会的評価が漢人的なそれへと変化しつつあったことが窺われ

る。そしてこの変化は、解放前後の時期の論者たちが不落夫家の原因を考えた際にも、現実の状況として彼らの脳裏に焼きつけられていたのであろう。

ともあれ、以上から、嫁は農繁期・年中行事に夫方に戻るが儀礼的な要素が認められること、嫁は里方でもさしたる労働力にもなっていないこと、嫁は父母から夫家の訪問の強制を受けないこと、それが正當か不当かは別にして嫁は自由な生活を過ごしていたであろうこと、しかし別の面では両家に対する両属性もまた見られたことが指摘される。ところで史料14をはじめ多くの史料には初生児の受胎後に嫁は夫方へ戻り、以降夫方に定居することになることが記されているが、最後にこの点について検討しよう。

五 不落夫家の終結

（一）出生儀礼

初生児を受胎した後に嫁は夫方へと戻って、しかる後に出産した。表1―1続文には、「娠むことが無ければ、（夫家に）帰らない」と記されている。嫁が夫方以外のところへ出産するのは、壮族のなかでも習俗がやや異なる「編人」の事例（民国『防城県志』七、風俗「灘散崗中編人之婚俗」を除いてほとんど見られない。『赤雅』上「丁婦」では、

婚礼の日に嫁は即ち生家へ還る。隣女とともに住む。時に夫と「野合」し、身ごもるや潜かに夫にそのことを告げる。夫は新居を建てて待つ。子を生んで初めて婦と称せられるのである。

とある。「子を生んで初めて婦と称せられる」ことから、子の出生を機に婚姻が確立する決め手となったであろうことが推測される。子の出生に際してそれを祝う儀礼も行なわれた。この点について次の記事がある。

〔表1-4 続文〕

妊娠するとそのことを密かに夫に告げる。夫は新居を建てる。また数年経ってから、師巫を招いて、「結花楼」儀礼を行ない、「聖母」神を祀る。戯劇を勧進して、親族の少男・少婦たち数百―千人もが、歌い飲酒し号叫する。三、四日の間、日夜続いて終わる。これを「作星」と謂う。

〔史料2 続文〕

婚後子女を産んだら三朝に湯餅会を做し族中の子供たちを集めて会食する。満月に子豚・鶏・アヒル・豚肉・酒・飯を備え、それらを担いで嫁の家に赴き祖先に奉げる。姻族の婦女を集め会食する。嫁側は稲穀を贈る（富家は五、六〇担、貧家でも必ず三、五担を贈る。並びに紅に染めた鶏卵三個、紅に染めた糯米のオコワ一担、及び襦袢の類をも贈る）。この夜、

親族老少を招待して歓楽痛飲する（「彌月酒」という）。聞き付けた親類朋友、若い女性たちも連れ立って来て豚腿肉・搗きモチ・子供の衣服や腕輪・帽子・靴を贈り、一、二夜泊まり唱歌する（「看児」という）。今も盛んに行なわれている。

ともに大規模な祝宴が行なわれ唱歌が伴なわれるのが特徴的である（史料2 続文の「担」について、約四担で一畝分の耕地からとれる穀物に相当する）。史料2 続文では「三朝」と「満月」との二度にわたって儀礼が行なわれ、とくに後者のそれは外家に赴き祖宗に奉敬した後、（夫方での宴会に）老若を問わず親族が多数来ている。表1-4 続文では子の出生からさらに数年経過していることから、新居が落成し分家をする時期と子供が生まれて数年後に行なわれる儀礼と重なっているかのように想像されるが、「師巫」が聖母すなわち子供の生育の神である花婆（花王聖母）を祀る儀礼を行ない、演劇を奉納するとともに対歌を実施している。ここで、嫁方から誰が儀礼に参加するのが不明確ではあるが、満月酒があたかも事実上の婚礼宴のように盛大に祝われていることは注目される。

（二）持参財の贈与

初生児の出生とともに持参財も送られたように思われる。この点について史料6 続文に次の記事がある。

嫁が生家へ戻って半月か一月後に婿は紅色に染めたオコワを用意して迎えに行く。これを「接二」という。嫁は婿の家に帰り一晩泊まってまた生家へ戻る。この後一、二ヶ月あるいは数月後に一往復する。甚だしい場合には屢々迎えても夫家に行かない者もいる。嫁が受胎するのを待って嫁方では初めて粧査および襦袢・鈴付き帽子等の物をそろえて贈る。また、牛馬・田地を送る者もいる。ここに至って嫁が初めて定居して团聚する。妊娠しなければ夫家に定居しない。おそらく多くは早婚の致すところであろう。

すなわち、婚禮の時に持参財を送るのではなく、受胎後に夫家に引き移る時に送ること、持参財の内容としては嬰兒用の襦袢・帽子のほか、中には牛馬・田地もあったという。また、妊娠せねばそもそも夫家に引き移らないことも重要である。受胎後に持参財を送る例としては、表3「土俗」の「婚後三、四年後に奩具を送る」という表現、また表2-15続文に「妊娠するのを待って、女方の父母は初めて帳被を用意し、花嫁を夫家に送り偕老させる」とある。さらに史料4には「数年経って嫁が長ずれば、更めて粧を用意するがそれはまるで初婚の礼のようだ」と記されている。この場合、漢族の初婚の際の嫁入り行列を思わせる光景が見られたのである。持参財の内容として史料2続文では、蚊帳・蒲団の類三、五組一〇組、あるいは牛馬が、史料



結婚披露宴の記帳をするところ。子の出生後に行なわれたので、タンス・蒲団などの持参財のほかには嬰兒用衣服も見える
(1989年12月、龍勝各族自治県和平郷にて)

6では牛馬・田地が、表2―15続文では帳・彼の類が挙げられている。また、持参財を用意する元手としては史料3では、夫方からの結納金が充てられている。

なお、史料2続文ほか多くの記事で、持参財は婚礼の時に持参されている。清代から民国期においては受胎後に持参財を送る地域は先の河池県のほか龍勝・寧明県など少数である。これらの地域で後の時期になって婚礼の際に持参財を送るように変化したという確たる証拠は目下のところ見出していない。しかし「娠むことが無ければ（夫家に）帰らない」「婚礼の時には嫁しても婚をなさない」状況においては、受胎後に夫家に帰る際に持参財を送っていたと考えるのがむしろ自然ではなからうか。仮にそうでないとしても先述のように生子後に盛大な披露宴が行なわれていることから、次のことが推測されるであろう。すなわち、不落夫家の本質として、一つには初生児の出生（とともに持参財を搬入した）時点で婚姻が成立するという点にあって、それ以外のさまざまな要素は後からつけ加わった本質とは無関係ないし関係が希薄なものであらうと考えられまいか。さらに想像を逞しくすることが許されるならば、この側面を持つ習俗であったがゆえに、初生児の受胎までの嫁の自由な行動について子供の生物学的な父親をめぐる憶測を交えた様々な記述がなされるようにさえなったと思われる。

整理

まず、本稿で検討したところを整理しよう。明末から清代を経て民国期に至る間に、婚姻に関わる多くの習俗が変化した。すなわち、(一)配偶者の選択方式において、当事者主導から父母主導型への変化がみられた。早婚や父母包辦婚は後から生じた方式である。(二)結納品・相性占い・婚礼までの過程も変化した。結納品はピンロウジ・牛・豚から銀元へと変化した。しかし他方で豚・糯米をも用いるなど壮族の伝統も維持された。相性占いは、漢人の「八字」を漢人の方式で用いるようになった。婚礼までの過程は複雑化し漢人のそれに近づいた。(三)婚礼の前に嫁方で盛大に唱歌を行なったが、多くの伴娘が参加し、また彼女たちは花嫁の嫁入りに随行した。その嫁入り行列のやり方は漢化し、夫方での儀礼も漢人のそれを受容した。だが、同時に婚礼の夜などに唱歌を盛大に行なう点で伝統も残された。花嫁が里方に戻る行為は「回門」といわれたが実は漢人の回門とは全く内容は異なっていた。(四)嫁の両属性。生家へ戻った嫁は農繁期や正月などの年中行事の際に夫方へ来て短期間逗留した。祖先祭祀や耕作への参加などで夫家にも属していたかのようだが、実際の家事・労働には関与しなかった。また、それは周囲から強制もされなかった。不落

夫家の期間中、生家・夫家の双方から自由な生活を過ごすことが社会的に認知された。しかし解放直前の頃にはそれが変化した。(五)初生児の出生後に大規模な祝宴を行ない、事実上の婚礼披露宴のようであった。所によつてはその際に持参財を搬入し、子の出生を機に婚姻が成立した。しかし多くの地域では、持参財は婚礼の際に搬入されるよう変化したようである。

以上にまとめたところが大過ないものとするならば、差し当たつて次の点が論点として指摘されよう。第一に、従来の諸説の欠陥について。すなわち早婚、女性の労働力の高さ、夫家での虐待に起因する女性の結婚に対する不満などの論点は、後に加わつた要素であつて、不落夫家の原因ではないか、あるいはそもそも不落夫家と因果関係にはない現象に過ぎないのである。この点に関連して、『広西壮族自治区編輯組(編)一九八四・五二一六二』では解放直前において不落夫家に二つの状況が見られたという。すなわち、父母包辦婚(ゆえに夫妻が婚姻に不満を持つような状況)に加えて、自由恋愛を経て結婚した後にも不落夫家が行なわれた。そしてその場合でも「習俗にしたがつて」不落夫家が行なわれた。里方で過ごす時間は短いし夫方に定居するのも一年後である。問題は女性が婚姻に不満を持たず適齢期に達しているゆえ父母も不安に想ふことの無い恋愛結婚の場合でも不落夫家が見られたことにある。ここ

に至つて不落夫家の原因とされてきた早婚・父母包辦婚・嫁の自由な生活への希求という論点では説明がつかなくなることが一層明確となるであろう。

第二に、壮族にとつての婚姻習俗の変化のもつ歴史的意義に関して。結納品・相性占い・婚礼までの過程の変化など、それまでになかつた漢文化的な要素が加わつたが、しかしそのことによつても婚後の別居・受胎による夫方への定居までの過程、とりわけ受胎によつて婚姻が成立するという不落夫家の關鍵となる部分は表面上は変わらないことに注意する必要がある(受胎する以前に、清代以降の史料に見える夫家での婚葬儀礼への嫁の参加など両属性が認められるようになってはいるが)。言いかえると、漢俗を導入しても自らの文化的特徴を残すことのできる方式が維持されてきたのである。ここに長期的な時間を経ながらも壮族の側においてそれが習俗として維持されてきた要因を指摘することができよう。

もとより、本稿で引用した史料からは説明するのが困難な点も少なくない。たとえば、「姉妹」の作用、通婚圈、不落夫家期間中の嫁の各種儀礼への参加の有無、またそもそも子の出生が婚姻成立の必要条件とされるような社会において分家や財産継承がどのように行なわれており、この婚俗とどう関わるのかといった問題が未検討である。それらは他日、不落夫家を経験した人々へのインタビューを通

して展開されねばならないであらう。

〔謝辞〕 本稿は国立民族学博物館共同研究「中国における諸民族の移動と文化の動態——いわゆる周縁地域を中心として」(代表者・塚田誠之)の研究會(一九九八年一月二七日)の席上で口頭発表をしたものの一部である。当日、出席しコメントをいただいた瀬川昌久氏およびほかの皆様に対して末筆ではあるが深謝の意を表したい。

注

〈1〉たとえば靖西県安德鎮大寨村〔壮語南部方言の一支「壮」(ジヨン)話〕では「サムベイヤ」(姑のところに行かない)、龍勝県和平鎮金江村楓木寨(壮語北部方言)では「リードウランゲイ」(夫のところに行かない)と言う。なお、壮語の用語ではないが別居の期間に注目した「三年不成夫妻」という言いまわしも俗になされる。

〈2〉史料は、多くの場合、漢人あるいは統治階層にある者、壮族から見ると異文化にある者によつて統治に資するため書きとめられた。誤解や偏見、記事の孫引きやその際の転写ミスなど問題点が少なくない。しかし、慎重に取り扱うことによつて活用が可能となると考える。

〈3〉「チワン族」は、厳密に言うと解放後の民族政策によつて登場した民族であつて歴史上の「獯」「狼」「土人」と表記される人々と境界が一致するとは限らない。が、本稿

では煩を避けるため便宜的に現在の族称をそのまま用いる。

〈4〉「范一九五九・三〇一三二」、「黄・黄・張(編)一九八八・六八九一七〇六」、「王承權一九九三・四一一五一」、「潘一九八一・七九一八二」。

〈5〉なお、莫は別稿では不落夫家の原因について単系進化論的な把握をしている「莫一九八一・一五八一六九」。

なお、袁少芬も、不落夫家の歴史、現時点での諸類型、それが発生し維持された原因、その評価など多面的な検討を試みている「袁一九八九・四八一五八」。現時点での諸類型や民族文化に優劣の価値判断を持ちこむことに対する批判は参考に価する。が、不落夫家の歴史や発生の原因については、ほかの学者と同様、理論的枠組を適用したために成功していないように見受けられる。

〈6〉不落夫家は他地域、広東珠江デルタや福建惠安県、广西寧明県の蔗園人など漢族、またリー・プイ・ミャオ族など、壮族以外の多くの民族に見られるが、本稿では壮族に対象を限定する。それが非漢族的な側面をもつ習俗として一定の共通性があるにせよ、广西の壮族と他地域とは社会経済的にもほかの面でも異なる発展を遂げたように思われるからである。

〈7〉ただし、「广西各県概況」一「邕寧県」によると、都市では多く一八歳以降、鄉村では多く二三、一四歳と都市・農村によつて結婚年齢に違いが見られた。

〈8〉なお、中国人にとつて婚姻とは婚姻の儀式そのもので

あるという定義がなされる「王向華一九九五・一四八一五六」ほど、漢人の婚姻には複雑な儀礼が伴なわれる。壮族の婚姻習俗の変化を検討する際にもいつ、いかに漢人的な儀礼を受容していったかに留意すべきであろう。

〈9〉ただし、広西のなかでも漢人が早期に移住した東部の珠江平野部では清初にすでにこの傾向が見られた。たとえば、光緒「貴州志」五、紀人、風俗、「旧志」によると、康熙年間に媒人に依託しての縁談、八字による相性占い、婚約、婚礼日期的決定、および往来の都度なされる贈答行為、という基本的な型が現れている。

〈10〉謝啓昆『樹經堂詩統集』（嘉慶五年（一八〇〇）序）五「桂林雜咏」の一首として、「路上の行人の口が羊のようで、また猩猩が血酔しているようだ。（原注：粵人はピンロウジを嗜み日々咀嚼してやまない。故に路上の行人の口も羊に似ているようだという嘲けりを受けた）」とあるほど清代中期の広西では広く用いられていた（田一九三五）によると民国期には南部の龍州・寧明・明江・思樂等の数県に限られるようになった。しかし、本文で示したように、時には都市民と農民、漢人と壮族との区別を強調するためか、あるいは内陸の鄉村では稀少品だったのか、それは都市民の習俗であると記された。

〈11〉唐末の史料「北戸録」二「鷄骨卜」に、南方（現広東・広西）では除夜の厄払いや船出の際に鷄を殺してその骨で卜占を行っていたこと、それは「（南）越」以来の古法を伝えたものであることが記されており、両広地域に共通

する古い習俗である。

〈12〉雍正「広西通志」九二、諸蛮、錢元昌「粵西諸蛮図志」に、「男女が結婚するときには媒酌による。庚帖を取って一甕の酒を準備する。できた酒が旨ければ吉で、結婚して夫婦となる」とある。

〈13〉「田一九三五・一〇八一〇九」にも思林県の場合、婚礼の数日前から「姉妹」たちに来てもらい唱歌すること、さらに夫家からも歌を善くする女子数人が女家に行き門前にて「闘歌」をするが、必ず夫方が「闘勝」してから、花嫁の乗輦が許されることが記されている。なお、嫁方だけでなく男方でもそれぞれ親戚が集まって宴会・唱歌が行なわれていたことが史料1続文（この場合、嫁方のほうでは半夜で宴会が終わり、夫方では翌朝まで続けられたという）や道光「永福県志」一、輿地「風俗」から窺われる。

〈14〉「田一九三五・一九四一・一九七」では東蘭県の場合、男性同士の特に親密な付き合いを「打老庚」「訂同年」ということ、東蘭県では女性同士の「訂同年」が多いことが記され、次いで複数の「同年」同士が新年にそれぞれ礼物を備え訪問しあうこと、その際に訪問先では隣村の青年を陪席させて唱歌すること、それは時に大規模かつ一、二週間も続く宴会になったことが記されている。また、乾隆「慶遠府志」一〇、雜類、諸蛮「獯」では、男女の年齢の等しい者が衣帯を贈答しあつて「同年」になり、女性が（別の男性と）結婚して受胎するまで往来が続いたことが記されている。

〈15〉「十姉妹」「姉妹伴」は多くの論者がその重要性を指摘しており重要であるが、史料的には不明な部分が多いので、その検討は調査資料を用いて別の機会に行ないたい。なお、「十姉妹」は壮族に限らず、百色や寧明の漢族「蕉園人」や臨桂県（漢族？）などにも見られる。

〈16〉「章一九三五・一三五―一三七」によると、「送嫁娘」は多い場合で数百人、少なくとも数十人にもなったという。経済条件にもよるが伴娘の多さが特徴的である。なお、花嫁が一日のうちいつ頃出嫁したのかについて、民国『遷江県志』や表2-12からは夜であることが窺われる。また「广西壮族自治区編輯組（編）一九八四・五二一六二」では早朝、夜明け前に出発することが記されている。いずれも多くの場合歩行して行くのであるから通婚圏はそれほど広くないであろうことが想像されるが、壮族の場合とくに歩行しての嫁入が多い（民国『榴江県志』風俗）のは通婚圏との関わりにおいて注目される現象である。また一年のうち婚礼が多い季節は、雍正「广西通志」三三、風俗「天河県」に「每年秋の收穫後に男女が贈答しあつた（結婚した）」ことが記されており、（容易に想像されるが）一般に秋の收穫後、冬季である。

〈17〉「广西壮族自治区編輯組（編）一九八四・五二一六二」では、新郎が嫁迎えに行き、嫁方の祖先を拝んだが、その際に「巫公」が同行した（花嫁が先に祖先を跪拝するがその時にも巫公が随伴した）。こうしたシャマンの随伴も壮族の婚姻の特徴である。

〈18〉「广西各県概況」五「榴江県」によると、嫁入の際に伴娘数十人が嫁に随行して「押送」し、夫方で群をなして徹夜で「土歌」を歌い、翌朝また皆で嫁方に戻った。誰が新婦だかわからないほどであったという。

〈19〉雍正「平楽府志」四、風俗「賀県」に、嫁方から花嫁の兄弟の嫁たちが随行して夫方に行くが、夫の家の門前に至って引き返す。かつては伴娘とともに答歌をした。

とあり、广西東部の賀県ではすでに清代中期に婚礼時の唱歌が廃れ、花嫁に随行する女性たちは嫁を送りとどけるや嫁方へひき返すようになった。また民国『荔浦県志』三、風俗「郷閭之属」に、

青香里には、猫と獐とが雜居する。唱歌して送親する習俗が有る。婚礼の時、男女双方が歌を善くする者を選んで、歌い合う。この習俗は光緒年間以前には見られたが近日次第に革まつている。

とあるように、广西中部の荔浦県では清末以降ではあるが、婚礼の唱歌が廃れ、广西東部に次いで早くに漢化したのである。

〈20〉なお、「广西壮族自治区編輯組（編）一九八四・五二一六二」では、伴娘が夫家において嫁に随行してイロリに跪つき、そしてイロリの周囲に座っている男方宗族長輩を跪拝してから、洞房へと移ったという。それは、壮族にかつて多く見られた干闥（高床）式住居でのよい習俗を窺わしめる重要な手がかりである。

〈21〉 この点に関する地域差も見られた。たとえば、「广西壮族自治区編輯組」(編)一九八七・一八八一・一九〇では、下雷州の場合、嫁は婚礼の翌朝には里方へ帰った。甚だしい場合には前門から夫家に入り後門から出て里方へ帰った。さらには、ただ右足で夫家の門の敷居を踏んだだけですぐに里方へ帰る者もいた、という。また「广西壮族自治区編輯組」(編)一九八四・五二・一六二では、隆林県の場合、三日間夫婦は同房でさず嫁は伴娘とともに新房にて寝ること、また三日間は針仕事も炊事もできないので、嫁は伴娘とともに刺繍をすること、三日目の朝になって伴娘が同伴して井戸に行き水を汲むことが記されている。

〈22〉 民国「柳城概況」三、民族「風俗習慣」には「郷間の女子には、回門後に生家に数年住み、必ず生子を待つて初めて夫家に戻る者がいる」と記されている。なお、「回門」^{ハイメン}は壮語にもそのままタムとして入っている。

〈23〉 なお、「南寧民国日報」一九三五年一〇月二九日「田東県不落家風俗」によると、不落夫家期間中、嫁は收穫期か、夫方で婚葬儀礼があるときに夫方に戻るが、多くの場合、午前中のみか半日余りで生家に帰ったという。

〈24〉 「田東県不落家風俗」(注23)によると、不落夫家期間中に夫方へ来た嫁に対して夫は「犯人を監視する」ようであったという。

〈25〉 「田一九三五・一八三一・一八六」にも、鳳山県では最初の一年は不落夫家をするものが多く、年中行事のたびに夫方に一、二回来るのみだが、さらに半年・一年と経って

身ごもると夫家に長住することが記されている。全体の期間が短縮されたうえ、夫方との往來の頻度が最初の一年間と後の半年間とで異なっている。

〈26〉 「姚(主編)・袁(副主編)一九九一・四八六・四八七」でも、生家が娘に「姑娘田」を分け与え耕作させた(收穫は娘の所有になる)地方もあった。不落夫家した女性が生家での労働で得た所得は全て彼女に帰し、父母・兄弟および夫は干渉する権利がなかった。それらの収入は全て夫家に定居するときに持参することができた、という。なお、广西では、不落夫家期間中の花嫁が綿花・藍栽培をしていたことが記される程度で、それも收穫物は自己の所有で、生家の助けになったわけではない。綿花・養蚕・製糸業といった社会経済的要素と不落夫家との関係において、たとえば広東珠江デルタの場合とは異なっている。

〈27〉 民国「河池県志」二、輿地上、風俗「南丹土州」に、獐人は毎年二月・七月に少年男女が付近の墟市・郊外の野原で、隊を組んで遊び、唱歌をして、それを「良媒」とする。互いに贈答して記念とする。父母や夫・親戚は禁ずることができない。(中略)近年この風俗はややおさまっている。

とある。未婚の男女のみならず「夫が禁ずることができない」ことから、おそらくすでに結婚して不落夫家期間中にある女性も対歌に参加していたであろうことが窺われる。「姚(主編)・袁(副主編)一九九一・四八六・四八七」にも、不落夫家の期間、花嫁は村の娘たちとともに歌掛けに

参加し夫以外の男性と情歌を唱い恋愛することが可能で、社交活動は「娘の時と同じ」ように自由だったことが記されている。

文献（漢籍史料以外）

- 范宏貴 一九五九「談談『坐家』和『不落夫家』」『史学月刊』一九五九（一二）：三〇—三三。
馮深 一九五七「不落夫家——一種趨沒落的民族婚姻習俗」『光明日報』一九五七年四月二十六日。
廣西省政府民政庁（編）一九三四『廣西各県概況』南寧・大成印書館。
廣西壮族自治区編輯組（編）一九八四『廣西壯族社会歴史調査』（一）南寧・廣西民族出版社。
同右 一九八七『廣西壯族社会歴史調査』（四）南寧・廣西民族出版社。
黃現璠・黃增慶・張一民（編）一九八八『壯族通史』南寧・廣西民族出版社。
尤真化・梁上燕 一九三八『改良風俗の実施』南寧・民団周刊社。
雷輝 一九三六『都安婚俗概述』『南寧民団日報』一九三六年一月二二日。
莫俊卿 一九八一「壯侗等民族母權制残余研究」中国民族学研究会編『民族学研究』2、北京・民族出版社。
同右 一九八六「壯族」嚴汝嫻主編『中国少数民族婚姻家庭』北京・中国婦女出版社（江守五夫監訳、百田弥生子訳「中

国少数民族の婚姻と家族」上、一九九六、東京・第一書房。
『南寧民団日報』一九三三年四月二〇—二一日「南寧鄉村婚嫁的惡習」（採訪）。

『同右』一九三五年一〇月二九日「田東県不落家風俗」（吃虧者）。

潘其旭 一九八一「壯族『不落夫家』婚俗初探」『學術論壇』一九八二（二）：七九—八二。

田曙嵐 一九三五『廣西旅行記』広州・中華書局。

王承權 一九九三「中国各民族不落夫家婚俗的比較研究」『民族研究』一九九三（六）：四一—五一。

王向華 一九九五「中国人婚姻的特質」『民族学研究』六〇（二）：一四八—一五六。

韋袞 一九三五「廣西恩恩果的結婚風俗」『申報月刊』四（二）：一三五—一三七。

楊煊 一九三四「廣西風俗概況」『廣西省政府公報』一九三四年八一二期（一九三四a・九期、一九三四b・一〇期）。

姚舜安（主編）・袁少芬（副主編）一九九一『廣西民族大全』南寧・廣西人民出版社。

袁少芬 一九八九「壯族『不落夫家』今昔」袁少芬主編『當代壯族探微』南寧・廣西人民出版社。

《壯族百科辭典》編纂委員會（編）一九九三『壯族百科辭典』南寧・廣西人民出版社。

※文中の写真はすべて、筆者が撮影したものである。